

地域医療連携だより

Vol.211
R2.12

長浜赤十字病院 地域医療連携課
〒526-8585 滋賀県長浜市宮前町14-7
TEL 0749-68-3314
FAX 0749-68-3315



地域医療支援病院・救命救急センター
地域周産期母子医療センター
地域災害医療センター
滋賀県地域がん診療連携支援病院
基幹原子力災害拠点病院



初冬の候、貴院におかれましてはますますご清栄のことと存じます。
平素より当院の地域連携に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。



遺伝カウンセリング外来を始めました

皆様こんにちは。臨床遺伝専門医の小児科・新生児科の山本です。

長浜赤十字病院では、2020年10月より遺伝カウンセリング外来を開設いたしました。成人の遺伝性乳がん卵巣がん症候群（HBOC: Hereditary Breast and Ovarian Cancer）、小児の先天性疾患の遺伝カウンセリングを中心に行っていきます。今回、地域医療連携だよりに取り上げて頂けると伺いまして、特にHBOCの遺伝カウンセリングについてご案内・ご説明させていただきます。

一部の乳がん・卵巣がんは、その発症に遺伝学的要因が強く関与することがわかっており、その中で最も頻度が高いのがHBOCです。これはDNAの修復に関与するBRCA1/2遺伝子に生殖細胞系列変異（生まれながらの変異）を持つことによるものです。これらの遺伝子変異を持つ人は、乳がんに関しては一般集団が12%の罹患リスクに対して38-87%、卵巣がんに関しては一般集団が1-2%の罹患リスクに対して16.5-63%と高率に発症することが知られています。遺伝子変異が判明した米国のハリウッド女優さんが、予防的に乳房や卵巣卵管を切除（リスク低減手術）したことがマスコミでも大きく取り上げられたことも記憶に新しいと思います。またBRCA遺伝子変異を持つ場合には、poly ADP-ribose polymerase (PARP) 阻害薬というお薬が効きやすいということが分かっています。つまりBRCA遺伝子変異をもった患者さんは、乳がん・卵巣がんにかかりやすい一方、治療にも反応しやすい可能性があるということです。

また2020年4月より以下に該当する方はBRCA1/2遺伝子の検索に健康保険が適応されることになりました。

- ・45歳以下で乳がんと診断された
- ・60歳以下でトリプルネガティブの乳がんと診断された
- ・両側の乳がんと診断された
- ・片方の乳房に複数回乳がん（原発性）を診断された
- ・男性で乳がんと診断された
- ・卵巣がん・卵管がん・腹膜がんと診断された
- ・腫瘍組織によるがん遺伝子パネル検査の結果、BRCA1/2遺伝子の病的変異を生まれつき持っている可能性がある場合
- ・ご自身が乳がんと診断され、血縁者に乳がんまたは卵巣がん発症者がいる
- ・ご本人が乳がん、卵巣がん、腹膜がんのいずれかを診断されていて、かつ血縁者がすでにBRCA1/2遺伝子に病的バリエーションを持っていることが分かっている場合

上記に当てはまる方は治療方針の選択のために、BRCA遺伝子変異の検索をする意義があると考えられます。

このBRCA遺伝子変異は、親から子に50%の確率で遺伝する常染色体優性遺伝形式をとります。ご本人にBRCA遺伝子変異が見つかった場合、これらのがんを発症していないご家系の方（父母・兄弟・子どもなど）も同じ変異を持っている可能性があります。そのためご家系の方も遺伝カウンセリングを受けることをお勧めします。

現在は地域の先生方から直接ご紹介頂くことはできませんので、外科、産婦人科へ患者様をご紹介頂き主治医の先生を通じて利用して頂くという形になります。以後、お見知りおき下さいますようお願いいたします。



新生児科部長
山本 正仁



心のこもったプレゼントをありがとう

長浜市内の民間保育園やこども園の園児達が、11月23日の勤労感謝の日を前に、市内施設にプレゼントを届けるという取り組みを行われました。当院には、11月16日、長浜愛児園の約30名の園児が代表で来院の上、長浜愛児園、小谷こども園、速水保育園の3園からの心のこもった作品を、院長、事務部長、看護部長に直接手渡しでプレゼントしてもらいました。かわいい園児たちに心とむひとときでした。



～年末年始休診のお知らせ～

年末年始休診日 12/29(火)～1/3(日)

※緊急時は、救命救急センターへご紹介ください。
TEL: 63-2111(代) FAX: 62-6134

なお、FAXによる1/4(月)以降の診察・検査依頼は可能ですので、引き続きご利用をお願いします。返信につきましては1/4(月)以降となります。ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いします。



8月23日、10月25日発行の読売新聞「病院の実力」にて大腸がん、胃がんの記事が取り上げられ、当院の実績が掲載されました。

便潜血検査で早期発見

今回は大腸がんを取り上げる。一覧表には、腹腔鏡手術や内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)などの治療実績を掲載した。大腸がんは、できる場所が結腸と直腸に分かれる。2017年の診断数は15万人を超え、がんの部位別で最も多い。5年生存率は70%以上で、リンパ節や他の臓器への転移がなければ80%を超える。治療の中心は手術。実績

病院の実力「大腸がん」
医療機関別2019年治療実績
(読売新聞調べ)

医療機関名	全手術 (件)	うち腹腔鏡手術 (件)	うちESD (件)	うちロボット支援手術 (直腸がん) (件)	内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) (件)
石川県					
公立松任石川中央	80	61	0	13	
加賀市医療セ	42	33	0	0	
福井県					
県済生会	141	91	0	14	
福井県立	131	123	0	14	
福井赤十字	129	95	22	10	
福井大	128	64	5	42	
滋賀県					
草津総合	153	51	0	33	
県立総合	120	105	20	19	
大津赤十字	120	84	0	40	
済生会滋賀県	91	84	19	25	
長浜赤十字	91	60	8	17	
滋賀医大	82	64	0	32	
彦根市立	66	61	0	4	
市立長浜	60	51	0	10	
近江八幡市立総合医療セ	54	47	0	42	
公立甲賀	34	32	0	17	
京都府					
府立医大	173	129	30	150	
国・京都医療セ	163	148	21	—	
京都大	158	103	40	50	
京都第一赤十字	145	113	0	40	
京都市立	141	118	1	7	
宇治徳洲会	109	71	0	9	
京都岡本記念	84	65	0	14	
武田総合	71	62	0	20	
京都民医連中央	56	38	0	80	
宇治	44	31	0	18	
宇治武田	25	19	0	0	
亀岡市立	19	6	0	0	

「国・」は国立病院機構、「セ」はセンター、「一」は無回答または不明。◇は腺腫含む。

全国の調査結果は19日の「安心」の設計面に掲載しました。

手術支援ロボ活用も

今回は胃がんを取り上げる。がんの中では大腸がんに次ぎ、2番目に患者が多い。一覧表には、2019年に行われた腹腔鏡手術や内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)などの治療件数を掲載した。

病院の実力「胃がん」
医療機関別2019年治療実績
(読売新聞調べ)

医療機関名	切除手術 (件)	うち腹腔鏡手術 (件)	手術中の迅速病理診断 (件)	内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) (件)
石川県				
県立中央	106	96	74	138
金沢大	66	24	41	66
金沢医大	45	18	0	43
公立松任石川中央	39	8	0	74
加賀市医療セ	17	1	0	32
福井県				
福井県立	63	39	31	111
福井大	61	11	11	66
福井赤十字	55	29	13	73
県済生会	50	33	0	33
滋賀県				
県立総合	51	23	16	64
済生会滋賀県	50	30	27	43
長浜赤十字	49	24	10	33
滋賀医大	37	30	37	58
大津赤十字	35	30	24	62
大津市民	34	32	4	48
彦根市立	31	29	29	43
草津総合	28	19	18	51
近江八幡市立総合医療セ	27	23	0	41
市立長浜	25	22	7	31
公立甲賀	6	5	0	53
京都府				
府立医大	70	43	22	178
京都第一赤十字	56	51	36	150
京都大	54	53	10	70
国・京都医療セ	53	43	50	98
京都市立	47	43	41	60
京都岡本記念	39	30	11	35
武田総合	34	31	10	44
三養京都	21	19	3	53
武田	16	8	2	32
宇治武田	9	5	1	3
亀岡市立	5	1	—	—
京都桂	—	—	—	112

※全摘、幽門側、幽門保存、噴門側の胃切除手術。「国・」は国立病院機構、「セ」はセンター、「一」は無回答または不明。

胃がんの治療は、手術、ESDなどの内視鏡治療、薬物療法が柱。がんの進行度、できた場所、転移の有無などを考慮して決める。かつては胃を全部切除する全摘手術が多かったが、小切口メタラと切除器具を入れて行う腹腔鏡手術が食事制限に伴う体重減少を少なくできる。手術の方法としては、おなかに小さな穴を数か所開け、小型メタラと切除器具を入れて行う腹腔鏡手術が多い。手術後は大きな影響が出ないため、近年は胃をできるだけ残す手術を行うことができる。近頃は、医師には高難度な技術が求められる。近年は、手術支援ロボットの用いて腹腔鏡手術を行うケースも出てきている。リンパ節などの切除範囲を決めるために、手術中に採集した組織を病理医が素早く検査し、がんの広がりを確認する「迅速病理診断」が全国的に広がっている。